トロポフ A. A.（訳：左近幸村）

ロシア極東アルヒーフの地域史研究への参画

ロシア極東アルヒーフ（正しくはロシア国立極東歴史アルヒーフ РГИА ДВ）の創設の歴史は、地域別の国立アルヒーフの創立そして活動と密接に結びついている。

革命前のロシア極東地域では、文官、武官、宗務の官庁の公文書課の幅広いネットワークが活動していたが、しかしそれらを統括する単一のシステムは欠如していて、そのために膨大な文書が失われ、地域の歴史的文化的環境に影響を与えた。

国のアルヒーフ業務組織化の基本条項を定めた、ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国（以下、ロシア共和国と略）人民委員会議の、1918 年 6 月 1 日付の布告「ロシア共和国のアルヒーフ事業の再編と集中化について」によって、ロシアのアルヒーフ事業は組織化の基礎が据えられた。すべてのアルヒーフ文書は国家の所有物、国民的財産と宣言され、政府所管のすべてのアルヒーフは、省庁所管としては廃止されて、そこに保管されていた文書は、「単一国立アルヒーフ・フォンド」に送られた。こうして、個々に離れ離れだった帝政ロシア期のアルヒーフの代わりに、国立アルヒーフ機構の単一システムが作られた。この布告により、1917 年 11 月 7 日以来活動を中断していた政府機関の文書は、「国立アルヒーフ・フォンド」へ送られた。新しい政府機関の書類（дело）は、所轄官庁の規定の保管期間が満了になった後、国家の保管に移行することも定められた。歴史的に価値のある公文書を「国立アルヒーフ・フォンド」へ集中させたことは、アルヒーフ事業の組織化を規定する条件の 1 つになった。

当初地方アルヒーフの創設は、県学術アルヒーフ委員会に委任される予定だったが、委員会が「アルヒーフ総局（Главархив）」の管轄に移され、同時に新しい州のアルヒーフ機関の創設という方法が取られた。「県アルヒーフのフォンドに関する規定」は、ロシア共和国人民委員会議の 1919 年 3 月 31 日付の布告により正文化され、法的に県アルヒーフの組織をゆるぎないものにした。この規定に沿って県にあるすべてのアルヒーフは、県アルヒーフ・フォンドを形成し、「単一国立アルヒーフ・フォンド」の下に編入された。

地方権力組織、官庁、学術的なあるいは社会的な組織の連携は、アルヒーフ・フォンド局の管理者、学術組織、教育組織、図書館、博物館、国民教育部門の各代表者からなる評議会を、県アルヒーフ・フォンドの責任者の下に創設することで実現した。県レベルのアルヒーフの構築や、アルヒーフ・フォンドの保存と整理に関する最も重要な施策の諸問題は、評議会の下で検討されることになった。

極東では、政府の布告の実現は国全体のレベルより少し遅れて開始された。1918-20 年の出来事は、文書を完全に消滅させてしまいかねないものだった。政府機関のアルヒーフは、窃取されたり破壊されたりした。このことは地元の知識人、特に、1920 年代に極東の学術文化の中心であった国立極東大学の教員スタッフの不安を呼びおこした。

政権が不安定であり、資金が欠如しているにもかかわらず、大学の研究者たちは「アルヒーフ委員会設立発起人会議」を結成した。

1920 年 7 月、極東共和国国民教育評議会に報告書が提出され、そこでは極東地方のアルヒーフ委員会を創設する必要性が表明されていた。国民教育評議会は陳情を拒否し、その拒否の返事を受取った後で、組織者により「アルヒーフ委員会設立発起人会議」が開かれ、アルヒーフ委員会の課題を実行しはじめた。

「アルヒーフ委員会設立発起人会議」は 1921 年 5 月 27 日の会合で、政治的状況と、チタにある極東地方政権との連絡が困難であることから、極東地方アルヒーフ局の設置問題の決定を見送った。このことと関連して、極東地方レベルではなく州レベルのアルヒーフ委員会の結成が必要であることが承認された。

発起人グループの臨時幹部会は、「沿海州アルヒーフ委員会に関する規定」を起草した。そしてこの規定案は 1921 年 7 月 16 日に国立極東大学の理事会の審議に付された。規定では、州アルヒーフ委員会は沿海州のアルヒーフ事業を統括・統制し、管理する独立の国家機関であるということが記載された。委員会は、国立極東大学に付属して作られ、いずれは州の行政府の独立部門となり、州の国民教育部門の管理下に入る権利を持っていた。

1921 年の終わりに、極東共和国国民教育省は「沿海州アルヒーフ委員会に関する規定」を承認した。そこには、委員会はウラジオストク市に設立され、沿海州のアルヒーフ事業を統括・統制、管理する独立した国家機関であり、州の国民教育部門の管轄下に置かれるということが、明記されていた。委員会は学術機関であり、基本的なその課題は、以下のようなものであると、宣言された。すなわち、地方のアルヒーフや機関に保存されていたアルヒーフ文書や各種史料を探して、分類し、学術的に評価し、出版すること。地域の諸民族の歴史や生活に関する遺物の情報を収集し、探しだすこと。地域にある往時の遺物の情報を収集し、保存することである。

委員会は、当時の情勢の中でその目標を十分達成することができなかったが、それにもかかわらず組織的なアルヒーフの建設を始め、価値のある学術関連のフォンドの保存という大きな仕事を導いた。

歴史アルヒーフ構築の重要な一歩は、アルヒーフ部門が教育人民委員部から中央執行委員会の直接の管轄下に移されたことである（全露中央執行委員会幹部会の 1921 年 11 月 24 日の決定）。これに続く 1922 年 1 月 30 日の決定で、「ロシア共和国中央アルヒーフ」を、共和国の全てのアルヒーフ機関の総体とする法律を承認した。「中央アルヒーフ」に関する規定は、共和国に共通するカテゴリーとして、国立アルヒーフ・フォンドの一体性を強調し、さらに地方のアルヒーフ機関の二元的な従属関係を一元化した。「アルヒーフ事業総局（Главное управление архивным делом）」は「ロシア共和国中央アルヒーフ局（Управление Центрархива РСФСР）」に改称された。

極東におけるアルヒーフの中枢の組織化は、ソヴィエト政権が確立した後の、1922 年 10 月に始まった。短期間のうちに極東革命委員会の指導部は、先行する諸政府の文書類の保

存、アルヒーフ網の形成に向けて、精力的な措置を取った。

1923 年 3 月 1 日、沿海県執行委員会書記局の下に、「沿海県アルヒーフ局」が組織され、旧「沿海州アルヒーフ委員会」もそこに合流した。

初代アルヒーフ局長には、文献学の教授アレクサンドル・ペトロヴィチ・ゲオルギエフスキーが任命された。局員は当初 7 名であった。アルヒーフ局は 3 つの部門からなっていた。編纂部門は、アルヒーフ的性格をもつ遺物の登録、検収、保存、技術部門は、「沿海州アルヒーフ委員会」の裁量下に移ったアルヒーフの整理、学術出版部門は、学術研究と紀要の出版を行った。

「沿海州アルヒーフ局」は、特別な位置を占めていた。それは何よりもまず、その活動がカムチャツカも含む幅広い領域をカバーしていたからである。カバーしていた領域は住民構成が極めて多種多様で、ロシアの各県からの移住者とともに、スラブの諸民族（セルビア、ポーランド、ブルガリア）、原住民、隣接するアジアの国々からの移住者等々が暮らしていた。こうしたことすべてが言語を多種多様にし、文書の探索を困難にした。

ここで指摘しておかなければならないのは、1926 年に至るまで、アルヒーフ局はアルヒーフ文書の収集と集中化に従事した、事実上極東唯一の国家機関であるということである。それゆえ沿海州アルヒーフ局の仕事の中には、州のみならず、国家全体にかかわる文書のフォンドも存在した。一連の史料の中には、たとえばデカブリストの手紙のような、西シベリアやザバイカルの生活様式を明らかにするもの、17－18 世紀の史料などがあり、その存在価値は、州の範囲をはるかに超えるものである。

1926 年まで極東では、チタ、ブラゴヴェシチェンスク、ウラジオストクの 3 つのアルヒーフ局が活動していた。しかしながらこれらは、沿海州のアルヒーフ局を除いて、これといって目立った仕事を行うことはなかった。その理由は、経済的基盤、文書を保管する建物、人員といったものが不足していることにあった。これらのアルヒーフ局の仕事の集約性については、集められたフォンドの数がよく示している。チタでは約 30、ブラゴヴェシチェンスクでは 31 であった。ウラジオストクだけは多かれ少なかれ可視的な成果を挙げており、ここではロシア全体にとって意義があるアルヒーフのフォンドが、150 以上集められた。

各地のアルヒーフ局の仕事を統括できる単一の指導的な中核がなかったことは、アルヒーフ事業の発展に影響した。このことに気がついて、極東革命委員会は 1925 年 3 月 13 日に、「中央アルヒーフ局」の支部として「極東州アルヒーフ局」を設立し、「ハバロフスク郡アルヒーフ局」をそこに合流させる政令を発布した。

このとき以来、「沿海県アルヒーフ局」の役割はめっきり縮小し、カバーする領域は変更された。

1925 年 2 月 3 日付の「単一国立アルヒーフ・フォンド」に関する規定により、各自治共和国、州、県に、歴史アルヒーフと十月革命アルヒーフという 2 つの独立したアルヒーフを、置かなければならないことが定められた。文章の時系列的な境界は、1917 年 1 月 1 日

だった。各地にそのような 2 つの独立したアルヒーフが作られたのは、全露中央執行委員会が十月革命 10 周年記念の準備に関連して、十月革命地方アルヒーフ創設の通達を出した 1927 年のことである。

これらの 2 つのアルヒーフは、各地域に、1941 年まで存在した。それ以外に、1934 年から 1940 年にかけて、この地方ではある程度大きな都市にはさらに、陸軍アルヒーフ、海軍・港湾アルヒーフ、秘密アルヒーフが作られた。

極東の行政領域区分の変更、ならびに県・郡制から管区・地区制への移行に関連して、「極東地方アルヒーフ局」が組織され、同局に、極東地方内の「単一国立アルヒーフ・フォンド」のアルヒーフ事業および所蔵資料は一任されることになった。「極東地方アルヒーフ局」は、地方執行委員会の幹部会の下にあり、それ自体が「ロシア共和国中央アルヒーフ」の地方機関であった。極東地域アルヒーフ局が取った措置のうち、最初の 1 つとなったのは、文書資料の整備とその保存、アルヒーフ局への移管に関する極東地方執行委員会の決定を準備することだった。

地区制導入の結果、県アルヒーフ局は管区のそれに改組された。特に「沿海県アルヒーフ局」は、1926 年 3 月 1 日から「ウラジオストク管区アルヒーフ局」と改称されて、地区執行委員会の管轄下に入った。

この時期積極的なアルヒーフ文書の利用が始まっている。学術機関・団体との関係が整備され、地方アルヒーフの文書が展示会で積極的に利用された。しかし残念ながら、文書の返還に関する管理水準が不十分で、そのうちのほとんどは展示された中央の博物館のフォンドに残された。

1936 年憲法が採択され、ソ連中央執行委員会が廃止された後で、ソ連最高会議幹部会の 1936 年 4 月 16 日付の決定により、アルヒーフ機関は内務人民委員部の組織に移行した。このときから、アルヒーフ事業を統括する中央の機関である「ソ連内務人民委員部アルヒーフ総局」は、連邦レベルおよび共和国レベルの地位を獲得した。ソ連内務人民委員部のシステムへの移行は、功罪の両面を伴った。肯定的な帰結としては、アルヒーフ機関のシステムが、画一性によってすべての連鎖を結びつけている官庁に転化し、厳格な秩序により、文書の保管作業がかなり改善されたことである。否定的な帰結としては、利用者のアルヒーフへの出入り、学術・文化目的の文書の利用が大きく制限され、学術機関、教育施設、公共の組織とのつながりが弱くなったことである。

アルヒーフ業務において重要な変更がもたらされたのは、大祖国戦争期であった。1941 年末、「ソ連内務人民委員部アルヒーフ総局」は、戦闘地域あるいはそこと直接接している地域にあるアルヒーフ機関に、文書の避難に関する指令を出した。極東各地のアルヒーフの非常に高い価値と重要性、そして極東の複雑な国際情勢を考慮して、政府はそれらを国の中央部へ避難させることを決定した。

極東各地のアルヒーフの疎開先として選ばれたのは、シベリアだった。1943 年 8 月、疎開したアルヒーフ資料を基にして、トムスク市で、ロシア共和国中央国立極東アルヒーフ

（ЦГА РСФСР ДВ）が作られた。ソ連人民委員会議の 1943 年 8 月 2 日の決議により、極東アルヒーフには、「ハバロフスク地方、沿海地方、チタ州と、そこに含まれる州と民族管区の国立アルヒーフにあるすべての文書史料」が編入され、これらの領域の国立アルヒーフは中央国立アルヒーフの支部に再編された[1]。

ЦГА РСФСР ДВ の指導部の分担となったものには、トムスクにおけるアルヒーフ活動の組織化のみならず、他のシベリアの諸都市に移動した史料の探索[2]や、それに加え地域支部からのフォンドの移動への資金の工面もあった。新たに編成されたチームに課せられたのは、「あらゆるフォンドの史料が、いつでも最小限の時間の消費で利用できるようにするために、近い将来活動を軌道に乗せる」[3]という課題であった。一足先に極東のアルヒーフからモスクワに移動させられたフォンドを、新設のアルヒーフに譲渡する計画が立てられ、さらに保管資料の総容量を 200 万保管単位まで引きあげて、極東地方レベルおよび各州レベルの地方アルヒーフからの文書によって ЦГА РСФСР ДВ の補充を継続することが計画された[4]。

今日の立場から、アルヒーフ・フォンドのシベリアへの疎開、そして ЦГА РСФСР ДВ の活動の組織化について、様々に論評することが可能である。しかしながら、疑いもなく、ЦГА РСФСР ДВ の職員たちの主要な功績は、大祖国戦争の困難な状況下で、記録的な短時間にフォンドの学術・技術的整理と登録を行い、従来の所在地では未整理ゆえに利用できなかった巨大な資料群を、学術情報の流通の中に組みこんだことである。ЦГА РСФСР ДВ の職員たちの手によるこれらの仕事の遂行は、文書史料の幅広い利用を組織化するのに必要なステップであり、最終的に貴重な歴史史料を保存することが可能になった。

アルヒーフの情報の体系的解明に関する長年の仕事の結果、便覧、目録、様々な情報を含んだ文書からなる数多くの価値ある資料が登録され、文書保管の維持、科学・案内部の設立、宣伝、文書の利用に関する仕事が行われた。

1953 年からアルヒーフは史料集の出版に着手した。各地域のアルヒーフ機関とともに次のような史料集を準備した。『北サハリンにおけるソヴィエト政権の勝利（1917-1925 年）』『ブラゴヴェシチェンスク：100 年史』『極東の産業復興への労働者階級の闘い』『極東における干渉軍と白衛軍の壊滅』『極東革命委員会』『極東における文化的建設』等々。

文書の利用と出版に関する大きな仕事にもかかわらず、トムスク市での活動には地域からの隔絶状態、すなわち過去に関する情報の主要な需要者である極東の科学アカデミー支部や高等教育機関との実務的な連絡の途絶が、影を落としていた。それゆえ 1960 年代初頭に、アルヒーフをハバロフスク市に再移転する試みが着手されたが、国際情勢の紛糾と十

---

[1] РГИА ДВ. Ф. Р-678. Оп. 1. Д. 3. Л. 2.

[2] 中央国立アルヒーフ長官フォミーンがソ連内務人民委員部アルヒーフ総局長に宛てた 1943 年 4 月 14 日付の布告によって、ミヌシンスクやその他の都市にあった 40 万 3 千保管単位の史料を、ЦГА РСФСР ДВ に送らなければならなかった。(Ф. Р-678. Оп. 1. Д. 4. Л. 60 об.-61.)

[3] РГИА ДВ. Ф. Р-678. Оп. 1. Д. 5. Л. 2.

[4] РГИА ДВ. Ф. Р-678. Оп. 1. Д. 4. Л. 4.

分な組織活動の欠如のため、このことは沙汰止みとなった。

急激な変化がアルヒーフの分野、アルヒーフを巡る政治と実務で起こったのは 1980 年代末から 1990 年代初頭にかけてである。それを導いたのは、連邦主義の原則の基づいた新しい社会的・政治的な国家建設、新しいアルヒーフ法の作成である。極東のアルヒーフの職員たちは、国全体のアルヒーフ職員と同じように、複雑で彼らにとって新しい問題の複合した総体に真正面からぶつかった。この時期、独特の「アルヒーフの飛躍」が起こった。その特徴は、祖国の歴史への関心の飛躍的な増大、歴史の過程の再解釈、精神的価値の再評価、つまりは、アルヒーフへの関心である。

アルヒーフの公開性の原則、つまり任意の自然人と法人に等しく開かれている原則の宣言、政治的弾圧の犠牲者の名誉回復に関する法律、強制移住させられた諸民族に関する法律、大祖国戦争の参加者、古参兵に関する法律の制定。要するに、歴史的に信頼できる史料に対する社会の需要が急激に高まったことで、アルヒーフ職員は、新しい条件の下で文書の利用方法を再考せざるを得なくなっただけでなく、実際に市民がアルヒーフの情報を受取る権利を行使するのを保証するため、精力的に活動せざるを得なくなった。新しい公共のアルヒーフ情報空間の形成の特徴は、歴史史料の範囲が拡大し、かつては手の届かなかったアルヒーフ文書が、学術情報の流通の中に組みこまれたことである。

1980 年代には、アルヒーフ組織すべてのこの地域への移転問題が、提起された。沿海地方の指導部は、指導的な極東の学者たちの提案を支持して、しかるべき提案を政府に送り、1991 年 2 月 13 日にロシア共和国閣僚会議は、決定第 96 号「ЦГА РСФСР ДВ のトムスク市からウラジオストク市への移転について」[5]を採択した。このときから準備作業が始まり、1994 年 1 月文書を積んだ最初の車両がウラジオストクに到着して、利用者のためにその扉を開いたのである。

現在、ロシア国立極東歴史アルヒーフ(РГИА ДВ)は、領域的な基準で編成されたロシアで唯一の連邦アルヒーフである。ここは 4129 のフォンドと、約 50 万の保管単位からなる。

アルヒーフは、連邦の所有物に入っている文書の集合体の恒常的な保管を行っており、次のようなものが含まれる。

—ロシア帝国の諸機関が極東において活動する過程で形成された文書（1722-1917 年）。諸機関の内訳としては、行政官庁、行政・警察機関、司法、身分自治および地方自治の諸機関、金融･信用機関、統計、税務、輸送･通信、通商･産業の諸機関、教育と保健、社会団体、宗教儀式の諸機関などがある。

—内戦期の極東に形成された臨時の諸政府、極東共和国の文書（1918-1922 年）。

—旧極東州（1922-1926 年）、極東地方（1926-1938 年）の領域で活動した、国家権力と統治の機構、組織、生産、農村、輸送、通信、保健の諸企業の文書。

—個人に由来するフォンド。

最初期の文書の 1 つが、オホーツク港長官、ギジガ哨所およびウダ砦の司令官のフォン

[5] РГИА ДВ. Ф. 678. Оп. 4. Д. 7. Л. 17.

ドに含まれている。特別な価値があるものとして、H. H.ムラヴィヨフ・アムールスキー、C. Ю.ヴィッテ等の、有名な政治家の自筆原稿、家系に関して膨大な階層情報を提供する教会の戸籍簿、統計資料といったものがある。

20 世紀初頭の文書の集合体も、情報の豊富さにおいて引けを取らない。そのほとんどが特別な保管所にあったもので、それゆえ利用者の目に触れなかったが、これらの文書には、ソヴィエト政権の樹立と強化の過程や、極東の領域的行政区分の変遷などが反映されている。

アルヒーフでは、部門の 1 つとして学術参考図書室が活動しており、極東だけでなく他の地域や中央で出された歴史学や社会科学のテーマに関する出版物も取りそろえている。今そのフォンドには、19 世紀から現在までの 8 千以上の保管単位がある。研究書や統計要覧類と並んで、法令関係の資料、統計・経済や軍事を主題とする概要、国勢調査の資料、社会評論、新聞、雑誌といった、幅広い公刊資料の集合体も含まれている。

世論は再び戻ってきたアルヒーフに、自分たちの過去について新しい知見が得られることを期待したし、当アルヒーフの職員は、何代にも渡って極東のアルヒーフ職員が収集した独自の文書のコレクションを、社会に公開するという難題の解決に取りくまなければならなかった。

この数年のあいだに、アルヒーフの閲覧室には 2000 人以上の利用者が訪れ、35 万以上の保管単位が請求された。

統計資料を分析してみると、利用者の半数は高等教育を受けた職業的な歴史家、大学教員で、そのうちの 3 分の 1 が博士候補号か博士号を持っている。アルヒーフの情報を切に必要としているのは、地域の教育機関の学生や院生である。彼らは主に、国立極東大学、国立極東工科大学、国立ハバロフスク教育大学、ロシア税関大学校ウラジオストク分校の所属である。

もちろん、すべての利用者が職業的な歴史家や社会科学者というわけではないということは、認識しておく必要がある。センセーショナルな事件やスキャンダルを探している人もいれば、単にそれまで目を通されていない文書に興味を持っている人もいれば、開拓時代にロシアの最果てにやって来た、自分の先祖の情報を捜しもとめている人もいる。祖国の歴史を知ることは、人類が生きのこるだけでなく、将来積極的に発展できるようになるための、中心軸の 1 つであるということを知っているので、アルヒーフ職員は誰をも助ける。というのは、アルヒーフに対する姿勢と関心は、歴史に対する関心であり、つまりは現代の生活とその問題への姿勢ということになるからだ。

利用者を職業別に見ると、社会のあらゆる階層から文書が請求されている。利用者のうち 70%が、博士候補と博士、研究員、大学生で、30%が郷土史家、学校の生徒、その他の利用者である。これまでアルヒーフ史料に基づいて、50 以上の博士候補論文や博士論文が執筆され学位が与えられたり、教科書や参考書が執筆されたり、何十もの研究書や論文が出版されたりした。

閲覧室では、アムール、カムチャツカ、マガダン、サハリン各州、ハバロフスク、沿海各地方や、他のロシアの地域（モスクワ、サンクト・ペテルブルク、クラスノヤルスク、ノヴォシビルスク、トムスク、エカチェリンブルク、チェリャビンスク、オムスク等）からの利用者が研究している。当アルヒーフの文書に多大な関心を示すのは、アジア太平洋の隣接国から来た利用者たちである。アメリカ、日本、中国、韓国、北朝鮮。それに加え、ドイツ、フランス、デンマーク、ポーランド等から来る学者もいる。

1994 年から 2004 年の期間だけで、当アルヒーフの閲覧室で 36 人の日本からの利用者が研究した。所属の内訳は、北海道（6）、京都（3）、新潟（1）、三重（2）、早稲田（2）、岡山（1）、大阪（4）、和光（3）の各大学、東京大学史料編纂所（1）、東京外国語大学（1）、大阪外国語大学（3）、東北大学東北アジア研究センター（1）、千葉県立大学（1）、民族学博物館（1）、さらにウラジオストク日本総領事館の職員、テレビ局の従業員等々である[6]。

彼らの学術的関心に基づくテーマの特徴は、研究上の問題に多岐にわたっていることである。それはロシア辺境の開拓と移住の諸問題、19－20 世紀にかけての極東における国際関係と露日関係、ロシアの統治機構の活動、漁業史、ウラジオストクの日系商社、都市建設史の諸問題の研究などである。

しかしながら、残念なことに、ウラジオストクでは現在に至るまで、アルヒーフを正常に機能させるために必要な、経済的基盤が上手く形成されていない。床面積が著しく不足しているため、アルヒーフのフォンドの一部は利用者の閲覧に供することができなかった。それにもかかわらず、アルヒーフのスタッフはフォンドの情報に関して最も集約的なフォンドの学術的利用に全力を尽くしてきた。

当アルヒーフの移転は、極東のアルヒーフ機関や学術機関からの隔絶状態を解消し、アルヒーフの連携機能と学術･方法論上の機能を引きあげるのにプラスの影響を与えた。現在、当アルヒーフは極東史の文書を扱う活動において、連邦レベルの学術･方法論上のセンターであり、情報センターである。1995 年から、当アルヒーフは極東連邦管区において基盤となるアルヒーフ機関であると定められている。

ウラジオストクへの移転後、アルヒーフの活動は目だって活発になった。職員の前には、課題があった。文書の公開性とその利用の効率を確保することである。

ウラジオストクでの活動が始まったときから、アルヒーフにより 30 以上の文書集が出版されている。1996 年から毎年、研究論文集『ロシア国立極東歴史アルヒーフ紀要』を出版している。この中には、歴史アルヒーフ職員の論文だけでなく、他の国立アルヒーフの職員、当地域の科学アカデミー傘下および諸大学の研究者、郷土史家や文化機関の職員、大学の院生と学生たちの論文も載っている。当アルヒーフの主導により、当地域のアルヒーフ職員、図書館員、博物館員が参加して、『ロシア極東で 1922 年までに出版された新聞・

[6] 次を参照: История Дальнего Востока России и сопредельных стран Азиатско- Тихоокеанского региона с XVIII в. до 1938 г. (Тематика исследований по материалам РГИА ДВ с 1994 по 2002 гг.). Справочник. Владивосток: РГИА ДВ, 2002.

雑誌の総目録』が作られた。

1994 年から 2005 年のあいだに、プリアムール総督府 115 周年記念、極東における高等教育 100 周年、「極東のキリスト教」「ロシアと日本」等々、60 以上の文書の展示会が開催された。アルヒーフの職員は 100 点以上の学術論文と、史料選集を発表し、地方や中央のテレビ局ために約 120 のテーマを提供した。アルヒーフの専門家たちは、学術的な、あるいは実践的な研究の会議に積極的に参加し、その中には国際会議も含まれている。しかも、それら会議の 3 分の 1 は組織者の一翼を担っている。国立極東大学の歴史・哲学学部と共催で、学生研究会議を行うのが慣例となっており、そこでは極東の歴史研究においてアクチュアルな問題が話しあわれている。

この間、当アルヒーフが極東の国公立のアルヒーフ機関のために作成した情報は 180 件以上に及ぶ。これら情報資料は、革命前ロシアの組織の創成と活動の歴史、土地利用の諸問題、居住地点の形成、産業・農業の発展、財産の問題、行政区画の歴史等々に関するものである。

特定テーマ、また家系や社会･法律上にかかわる諸機関、諸組織、外国人をも含む市民の照会に対するレファレンス業務もまたアルヒーフの機能の 1 つである。この 10 年間に、2 万 5 千以上の回答を行ってきた。それは歴史的事実や出来事の確認や修正に関するものであったり、過去の人の活動履歴を再現するものであったりした。アルヒーフの情報は、博物館の陳列の作成、展示会の開催、祝賀記念日などの際、ならびに博士候補論文、博士論文、学年レポート、卒業論文の作成に利用されている。

ロシア国立極東歴史アルヒーフは、国際的な学術交流にも参加している。1996 年に当アルヒーフの主催で、アメリカの太平洋岸と極東地域のアルヒーフ職員の第 1 回国際講習会が組織され、開かれた。これにより、両国のアルヒーフの仕事の経験を交換できただけでなく、双方のアルヒーフの仕事を直接知ることができた。極東のアルヒーフ職員の代表団はアメリカに赴き、アメリカのアルヒーフ職員は当アルヒーフとハバロフスク地方のアルヒーフの活動を視察することができた。

当アルヒーフの職員は国際アルヒーフ学会（1996 年、中国、北京）に参加した。国際シンポジウムは、韓国、アメリカ、中国、北朝鮮で開かれている。

地域の基盤的なアルヒーフ機関として当アルヒーフは、極東連邦管区にあるアルヒーフ機関の組織的な研究に関する理事会のすべての会議、経験交流セミナー、協議会の組織者であり、地方や州のアルヒーフ、そして地方自治体の教育の大部分を連携させている。

以下のような、地域の実践的な研究会議も開かれている。「新世紀に向かう中でのロシア極東のアルヒーフ」（1998 年 6 月）、「世紀転換期の極東地域におけるアルヒーフ事業発展の回顧と展望」（2001 年 5 月）、「ロシア極東のアルヒーフ：過去、そして未来へ」（2003 年 9 月）。

当アルヒーフの職員と科学アカデミーや大学の学術研究者の不断で実務的な連絡、研究や出版活動の連携、学術情報と作業計画の交換により、学術研究の分野における研究員の

養成に共同で取りくんだり、学生や院生が研究テーマに関する史料を選別するのを手伝ったりすることが、できるようになった。アルヒーフによって講じられた過去の情報の公開性を確保する対策や、出版活動の大きな発展、会議への参加によって、トムスクにあった頃と比べて、アルヒーフ情報の利用者の需要は比べものにならないくらい満たされている。

極東への歴史アルヒーフの返還は、ロシア政府によるそのような決定の適宜にして正当であったことを示しており、そこから引きだされる結論は、次世代のため極東のアルヒーフの情報ポテンシャルを保存し、歴史史料を学術的利用に供する上で、アルヒーフ職員たちが大きな実り多い活動を展開してきたこと、そしてこれによって「アルヒーフ・フォンド」の文書をより効果的に利用できるようになり、文書を効率よく検索するための最適な条件が確保された。しかし同時に、問題も明らかになった。その問題とはまず何よりも、ウラジオストク市でのアルヒーフの経済的・技術的な基盤の創出に関するものであった。すなわち、史料を収容するのに十分な床面積の確保、古文書修復の基礎の創出、特別貴重な文書の保険基金や利用基金の創設である。

ロシア社会に起こっている政治、社会経済、社会生活の変化のために、国際的な多方面の学術交流は強化され、その中には学術論文の公刊、文書集の作成、教育機関の教員と大学院生の研修、学術会議やシンポジウムの共催ということが含まれている。当アルヒーフの職員たちは、北海道大学スラブ研究センターの指導部が、我々に日本を訪問し、アジア太平洋地域における、最大の学術機関の活動を知る機会を与えてくれたことに感謝しており、将来にわたってもお互いに有益な協力を続けたいと言明する。この協力は、我々双方の国の研究者、教員、学生がお互いをより理解するのを助け、歴史文書を用いた仕事は、両国のあいだの文化的な関係を強固なものにすることになるだろう。

（訳出に当たっては、東京大学史料編纂所の有泉和子氏が別個に作成された翻訳文を参照させていただきました。ここに記して感謝します）